

[書 評]

タイルとホコラとツーリズムの峠越え

——「芸術のための芸術」の向こうへ

埜 美智子

（京都精華大学非常勤講師）

専門化されたひとつの研究分野を追求する時、しばしば言説的な行きづまりを迎えることがないだろうか。評者が専門としてきたのは近現代の美術史や芸術学であるが、この領域において乗り越えたい（と評者が感じている）のは、「芸術のための芸術（l'art pour l'art）」というモダニズム芸術を象徴する言葉だ。

近代化による社会構造・学問体系の変化を被ることで、芸術は他分野から切り離され、更にメディアムごとに細分化され、芸術の自律性を追求する還元主義こそを芸術におけるモダニズムとするパラダイムが設定されてから、すでに長い時が経過している（こうしたモダニズムの定義は、アメリカ型抽象表現主義絵画を擁護するクレメント・グリーンバーグを中心に1950年代に築かれたものだが、基礎的な議論は以下の書籍等で参照することができる。『グリーンバーグ批評選集』藤枝晃雄訳、2005、藤枝晃雄『モダニズム以後の芸術』2017）。大雑把に概略すると、この西洋型近代美術の概念は、「近代美術館」というパッケージとして植民地主義的に全世界に波及していき、グローバル・スタンダードとしての美術史を形成してきた。美術館という教育機関の刷り込みによって、「芸術のための芸術」という命題は、いまなお再生産され続けていると言える。この歴史の継承者に課されているのは、越境の禁止と

自己（制度）批判精神である。域外に越境しているかのように見えても、それは自らの領地の境界線の見極めと位置づけられ、「前衛（avant-garde）」は、フロンティアを開拓し続ける任務を背負っている。1960年代には、ハプニングやイベントといった美術館の外で展開されるパフォーマンスな美術の動向が隆盛するが、これらもやはり美術館への制度批判として、「前衛美術」のドグマに回収されていく。1980年代以降、具象絵画の復活、インスタレーションの増加、多文化主義等、数々のポストモダンの表現が現れ、これらの登場が評価軸の喪失（あるいは無限増殖）を意味する一方で、あいかわらず、モダニズム芸術への批評としての機能に評価の力点が置かれがちだ。

前置きが長くなっているが、本書の領域横断的な共同研究のきっかけとなったのは、中村裕太と谷本研という二人のアーティストのアート・プロジェクト「タイルとホコラとツーリズム」（以下、THT）にあったという。2016年に展覧会の形式で発表されたTHTの《白川道中膝栗毛》（本書に再編集された写真絵本を所収）は、『北白川こども風土記』のこどもたちの郷土調べの足跡を実際に辿ったアート・パフォーマンスを元にしたものだ。中村と谷本はそれぞれ、社会的事象についてのリサーチ（調査）を基盤に制作をおこなうアー

ティストであり、共同制作である THT においては、ツーリスト（観光する者）の持つズレた目線によってリサーチすることで、対象を脱構築するアウトプットに繋げている。

彼らのアート・プロジェクトは、昨今に「地域アート」と呼ばれる芸術実践の一つとみなされる場合もある。これは、当該地域の固有の文脈についてフィールドワークやリサーチをおこない、地域住民と共創するような創造活動の通称だ。1990年代以降、日本国内では公共事業としての地方芸術祭ブームが起り、従来の美術館の外側で「地域アート」的实践が積み重ねられてきた。『地域アート 美学／制度／日本』（2016）の著者・藤田直哉は、こうした作品群について「前衛のゾンビ化」と揶揄し、60年代的な前衛の手法が行政的ロジックに換骨奪胎されている事態に疑問を呈している。「芸術」以外の別の目的に適応するアートへの抵抗感は、冒頭から述べてきた通り、美術の歴史を学んだ者に内面化された「芸術のための芸術」の根強さを表しているとも言えるだろう。

しかしながら、本書における THT の振る舞いの特徴は、このようなディシプリンの閉鎖性から逃れて軽やかに越境し、積極的に他の学問分野へのアクティベートをおこなっているという点だ。その鍵となっているのは、同じように対象のリサーチ（調査）から出発しながら、ファクトを積み重ねる実証的研究とは全く異なる成果物に結びついていることだろう。《白川道中膝栗毛》では、パフォーマンスの中に、過去軸（『北白川こども風土記』を執筆したこどもたち・描かれた過去の表象の中の馬借や花売り）と現在軸（アーティスト自身がポニーと歩きながら路傍の石仏に花を手向ける）を交錯させ、またその結果としての未来軸（予期せず得られたポニーの「栗毛」の筆で、大津絵を模した「栗毛絵」を描く）を導入したことで、それらをフィクション（仮象的なもの）として

融合させていったことに、芸術表現としての達成がある。ファクトを元としながら想像力を介入させることで、縦横無尽な語り直しをおこない、異化作用を生じさせているのだ。文化人類学者の石倉敏明は、「アートとともにある学知／学知とともにあるアート」の両者の協働による世界認識の革新の可能性を説いているが（『アートと人類学の地殻変動』『美術手帖』2018年6月号）、本書でおこなわれているのは、まさしくこうした協働的アップデートのように感じられる。この場合のアートは、「作品」という目的だけを志向するものではなく、本書で池側隆之が論じている、情報の組み替えや編み直しを誘発する「メディア・プラクティス」として、ツールを志向するメディアに近づく。「芸術のため」から解放された芸術は、「用いられる」実践のプロセスの中に、美的性質を見出していくべきものだろう。

『北白川こども風土記』という一つの魅力的な対象について、各分野の研究者が多視点から論考を投じた本書の試みは、専門分野の蛸壺化を他所目に、芸術もまた自らの領域を開き、横断的知の実践方法の一つとして機能しうる可能性を感じさせる。本評は現代アートをめぐる状況の実感から、これを書き連ねてみたものであるが、この種の行きづまりは、おそらくどのような分野、どのような対象にもありえるものかもしれない。ところで、この『北白川こども風土記』をめぐる最大のアポリアと言え、*「あなたのとこやからできたのや」という「北白川」のコミュニティ成立の特異性を要因として、この営為を回収する言葉だったようだ。思考停止を導くような言説を越えて、各方面からその内実を詳しく紐解いた本書は、対象をあらゆる回路から有機的にとらえるユニバーサルな学知こそが、世界の捉え方を更新させると示している。*